207 赤沼田ヒノキ人工林成長試験地（赤沼田232い・ろ）
（赤沼田天保林・希少個体群保護林）

試験期間　S47～　　最終調査年度　令和4年　　2022年

1 設定の目的と取扱い

飛騨地方が天領であった江戸時代の天保７年（１８３６年、平成１２年樹幹解析）に植栽された、国内でも数少ない高齢級の人工林で、歴史的・学術的にも価値が高いとして昭和３７年に「学術参考保護林」、その後平成５年に「赤沼田天保ヒノキ植物群落保護林」に指定し、維持・保存している。

昭和４７年に試験地を設定し、大径材生産の指標林として林分構造や成長量の推移を調査している。

2 場所等

下呂市小坂町赤沼田　　赤沼田国有林２３２林班い小班・ろ小班

機能類型等：　水源涵養タイプ

3 面積

2.97ha（調査プロット 0.106ha）

4 施業等の概要

古文書（南方山方植木一件）によると天保１２年（１８４１年）小坂村ほか４６ヶ村に対し、１ヶ年につき１戸５０本公役造林を課し、翌年から実行された。赤沼田村では天保１３年、１,８９０本、翌年には2,１８９本植栽した。天保林はこの時期でただ一つ現存する植木場である。苗木は天然の稚樹を山引きしたものが植えられたといわれる。

明治、大正時代に、枝打、間伐が実行されたが、以降手を加えていない。

5 地況

標　高	７６５m～８４０m
平均林地傾斜	１３度
方　位	北東（い）、北（ろ）
土壌型	褐色森林土壌（B_D（い）・B_B（ろ））

6 林況

調査年	S47年 (1972年)	S57年 (1982年)	H4年 (1992年)	H14年 (2002年)	H24年 (2012年)	H30年 (2018年) 全木調査	R4年 (2022年) プロット調査	
本数(本/ha)	387	387	377	377	377	349	349	
平均胸高直径(cm)	39.4	43.2	44.8	47.3	48.7	52.8	51.5	
平均樹高(m)	26.8	28.2	29.7	29.9	31.0	32.9	32.0	
材積(㎥/ha)	658.7	795.7	859.9	932.3	1012.1	1087.7	1106.7	

7 その他

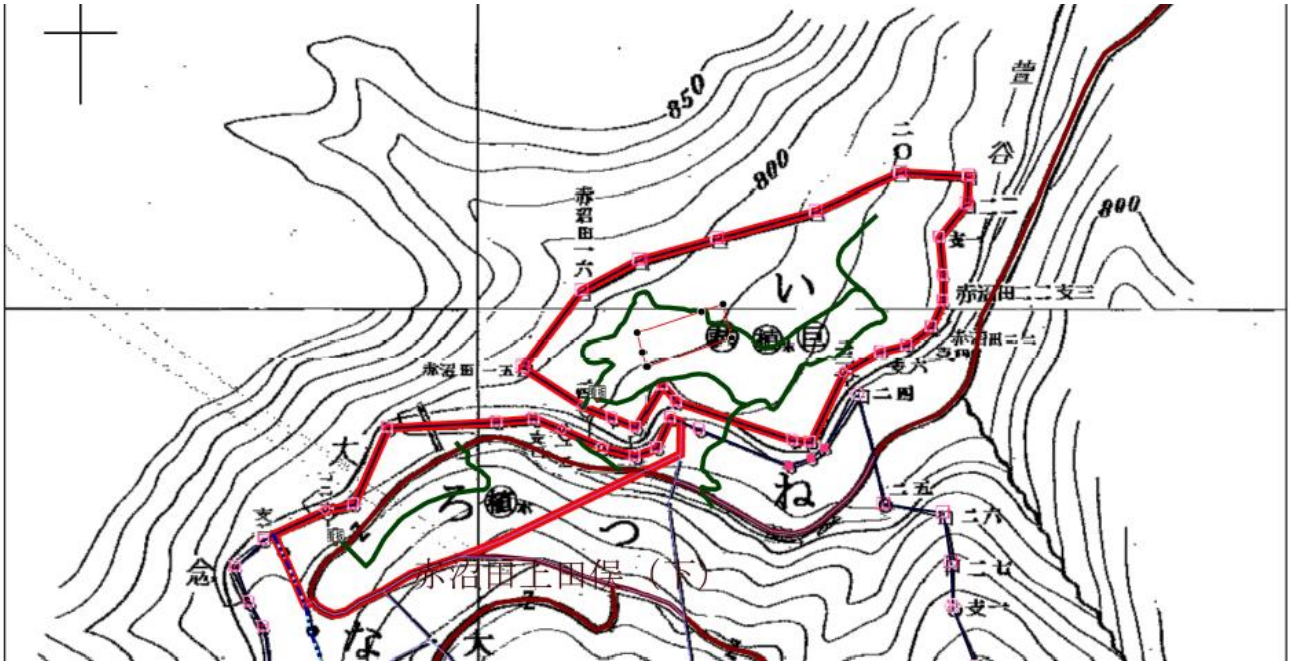
天保林を対象とした技術開発として、昭和５０年には数本を試験的に伐採し樹幹解析、材質試験を行った結果「「木曽ヒノキに比べて、樹高・肥大成長とも良いが、７０～８０年生頃より肥大成長が緩慢になり、年輪幅も緻密で木曽ヒノキ並となる。材質・強度・加工性・表面試験などでは優位さは認められなかった」としている。

昭和５７年には大径材生産の指標として材質・価格の検討を行っている。

平成８年には天保林内の全木調査を実施している。

平成１２年には、台風（平成１０年）により根倒しとなったもの（ヒノキ２本、サワラ３本）を樹幹解析し成育状況等を報告している。（名古屋局業務研究発表集より）

平成２６年に立ち枯れによる危険木として伐倒されたもの（ヒノキ１本、サワラ２本）を樹幹解析し、翌年の中部森林学会で報告している。

平成３０年には天保林内の全木調査を実施し、平成８年時との成長比較を同年度の中部森林技術交流発表会にて報告している。発表の中での質疑応答で２０年に一度全木調査を実施することとした。

令和 4年度（2022年）＝プロット調査
令和14年度（2032年）＝全木調査
令和24年度（2042年）＝プロット調査
令和34年度（2052年）＝全木調査